

17世紀以前のウェールズにおけるハープと音楽

寺本圭佑

Harps and music in Wales before the seventeenth-century

Keisuke Teramoto

Abstract: Before the triple harp was introduced to Wales in the late seventeenth-century, Welsh bards played a distinctive harp through the centuries. A true Welsh harp, it had a single low, horsehair-string, and the harp was leathered and bray pinned. In

Wales, the sound of the bray harp was praised and highly regarded by bards. The music for the bray harp in Wales is still preserved in Robert ap Huw's manuscript (c.1613). Traditional music is compiled in this manuscript by Robert ap Huw (c.1580-1665) who was one of the last Welsh bards. This article describes some elements of the distinct Welsh music from two points of view: the instrument and the musical score.

17世紀以降のウェルシュ・ハーブ

ウェールズ法には、よき人々Gwrdaにとって必要不可欠なものは「ハーブ、格子縞の肩掛け、そして大釜」、別のヴァージョンでは「チェス・マント・ハーブ」の3つであると記されている。このように、ウェールズではハーブという楽器が古くから重んじられており、現在でも18世紀から継承されているハーブ音楽の伝統が残されている。現在一般的にウェルシュ・ハーブと呼ばれている楽器は、別名バロックハーブあるいはトリプルハーブとも呼ばれ、通常のハーブとは異なり、3列の弦を持っていることが特徴である。外側の弦はピアノの白鍵、内側は黒鍵に相当する音に調弦されているため、半音階を自由に演奏することができる。バロックハーブという異名が示すように、この楽器はバロック時代(1600-1750年頃)に広くヨーロッパで演奏されていた。ところが1720年代にバイエルンのヤコブ・ホッホブリュッカーによってペダルハーブが発明され、ペダルによって半音階を出すことが可能になってから、ヨーロッパではバロックハーブは次第に演奏されなくなった。ペダルハーブはウェールズにももたらされ、19世紀にはハーブのリストと呼ばれたエライアス・パリッシュ＝アルヴァース(1808-1849)や、ヴィクトリア女王のハーブ奏者だったジョン・トーマス(1826-1913)といった優れた演奏家を輩出した。新しい楽器がもたらされた後も、ウェールズではトリプルハーブは演奏され続けており、ナンシ・リチャーズ・ジョーンズ(1888-1979)をはじめとする優れた演奏家が活躍していた。しかし17世紀以前のウェールズでは、何百年もの間これらとはまったく異なるハーブが演奏されていた。

ウェールズ固有のハーブ

アイルランドには14世紀に作られたトリニティ・カレッジ・ハーブが、スコットランドには15世紀から16世紀初めのクイーン・メアリー・ハーブ、ラumont・ハーブが現存している。これらの楽器は構造的にがっしりとした造りで、金属製の弦が張られていた。一方イング

も動物の皮が張られていたといわれる。5世紀ころにエジプトなどから、キリスト教の隠修士らがウェールズやアイルランドにやってきていたが、これらのキリスト教徒が中近東の皮の張られたハープを直接ウェールズにもたらしたのかもしれない。

ブレイハープ

17世紀以前のウェールズではブレイハープ (bray harp) と呼ばれる楽器が演奏されていた。ブレイとは「ロバの鳴き声」や「騒々しい不快な音」を意味する英語である。ブレイピンと呼ばれるL字型のピンが弦と弦の間に取り付けられていて、弦をはじくとこのピンに触れて共振し「ぶんぶん」というノイズを発生させるのである。ブレイハープはウェールズだけではなく、中世・ルネサンスを通してヨーロッパで広く演奏されていた楽器であり、別名ゴシック・ハープとも呼ばれる。

筆者はヒエロニムス・ボスの《快樂の園》に描かれたブレイハープを復元した。この楽器は共鳴胴が薄く、軽量で持ち運びが楽であるという利点があるが、その反面ブレイをつけない状態で弦を弾くときわめて小さな音しか出ない。ブレイを取り付けることによって、倍音を多く含んだノイズが発生し音量が増幅するのである。この構造は、日本の琵琶や三味線にみられる「サワリ」と呼ばれる構造と類似しており、アメリカの作曲家ジョン・ケージ (1912-1992) が考案したプリペアド・ピアノも同じ発想である。

ドイツのハープ作家エリック・クラインマン氏は14-16世紀のヨーロッパのハープのほとんどはブレイハープだったことを教えてくれた。つまり、教会のステンドグラスに描かれた天使のハープは、われわれのイメージとはかけ離れた実に耳障りな音を立てていたのである。ブレイの音色はアイルランドの金属弦ハープの甘美な音色ともまったく異なっており、実際に聴き比べてみるとグリフィズ・アブ・カナン¹の伝説にも納得がいく。

ウェールズでも16世紀前半のステンドグラスにブレイハープを演奏する天使が描かれている。また、カーディフの民俗博物館に保存されている小さな銀のハープのブローチにもブレイが取り付けられている。このブローチは、1568年にカーウィスで行われたアイステズボドで、最も優れたハープ奏者に与えられたものである。16世紀半ばに書かれたウェルシュ・ハープを描写した詩にもやはりブレイハープへの言及がある。